

鬼怒川観光の歴史と課題

中村修也*

The Study of the History and the Problem with Sightseeing in
Kinugawa-Onsen Area

Nakamura Shuya

はじめに

レミングの大移動という現象がある。異常発生したレミングが直線的に行進をはじめ、ついには海や湖にまで突っ込んで死んでしまうという現象である。現代人の日常生活もまたこのレミングの大移動と似ているのではないだろうか。ひたすら「発展」を目指して前に突き進む。仲間の誰が脱落しようと見向きもしない。進行方向に何があるかと目に入らず、踏み潰して通ってゆく。公害を出そうが、自然を破壊しようが、おかまいなしだ。人より早く滅亡に突き進むことが最大の目標である。

誰かこのレミングの行進を止めることができないのであろうか。仕事、仕事の毎日、発展、前進の日本。ところが、人間はそんなに都合よくできていない。人間も動物である以上、休息が必要だ。ライオンだって狩りをしている時以外は寝そべっているではないか。人間は機械ではないのだ。機械だって普通に使っていても耐久年数以上には使えない。まして最近の家電製品は3～5年で壊れるようにできているという。普通に使っていても壊れる機械を長持ちさせるためにはメンテナンスが必要だ。人間にとってのメンテナンスが、

旅行や余暇ではないだろうか。

旅行によって、日常の仕事、生活から逃れて、身体と精神をリフレッシュさせる。それによって、邁進するレミングの行進列からはみ出て、自分の行くべき正しい方向を考え直すことができるのではないだろうか。

旅行の空間性と時間性

近代に入り、鉄道の発達、交通網の整備とともに、旅行が 대중化するようになったという指摘がある。石森秀三は「かつての旅は徒歩が中心であり、そこではトポス（空間）の移動が大きな意味をもっていた。それに対して、近代になって鉄道や汽船や自動車や飛行機などの交通手段が発達することによって、むしろトポスより、クロノス（時間）が大きな意味をもつようになった」と前置きしたあとで、「速度のテクノロジーの発達は、『空間距離から時間距離へ』と重要性の比重を移してきた。いまや空間距離は現実にはあまり意味をもたず、時間距離が非常に重要になっている」と指摘する⁽¹⁾。たしかに東京の地下鉄で、葛飾区から渋谷区までゆく時間と、飛行機で羽田から関西空港まで飛ぶ時間は、時間的には大差なく、距離的には大幅な違いがある。つまり空間的な距離は目的地に「移動」という点においては意味をもたず、時間的な距離のみが意味をもつ時代となってきて

*なかむら しゅうや 文教大学教育学部

いる。

また、石森と同じ研究グループの池田光穂は、「観光において、異境体験と空間の移動は重要な要素として密接に結びついていた。しかしながら、今日の観光において、空間の移動とそれに伴う時間の経過は、異境体験に伴う消極的な演出効果においてしか意味を持たないように思える。空間移動に対して大した評価が与えられないのは、いわば観光自身がフィクション化するような状況を生みつつある証拠なのである」という指摘を加える²⁹。海外旅行を例にとった場合、時間的短縮はたしかに一面で大きな革命であった。ヨーロッパに行くのに、船で何週間何ヶ月もかけて出かけるなければならないのであれば、これほど日本人がヨーロッパに気軽に旅行するようにはならなかったであろう。まさに旅客機の発展による結果である。

だが旅行の本質は異境体験だけであろうか。また異境における行動・体験だけが旅行であろうか。旅行がわくわくするのはなぜか。面倒でも自分達で時刻表を見て、列車や飛行機の時間を調べ、宿泊施設を確保する。ここから旅行が始まっているのではなかったか。そうして列車に乗り込み、お菓子を食べながら、あるいは一杯やりながら、同行の仲間と無駄話をする。それも重要な旅の楽しみではなかったであろうか。

もちろん旅行斡旋業者が存在する現在、お膳立てはそちらにまかせてもよい。だが、パッケージ・ツアーにしても、実はその途中のバス車内での談話に花が咲くことはしばしばだし、旅行業者もそのことで苦労しているはずだ。最近、テレビの「電波少年」という番組で、猿岩石という若者二人組が香港からロンドンまでヒッチ・ハイクして到達するという企画があり、これが若者視聴者の支持を得た。もちろん番組構成のうまさもあったが、飛行機や船を使って簡単に目的地に着くのではなく、英語もろくに喋れない二人が苦労し

てヒッチ・ハイクするその姿に視聴者は共感を覚え、感動したのである。つまり目的地に行くのではなく、到達までの過程に、見ている側はなにかしら熱いものを感じ、小さな羨望を抱いたのである。

ドラエモンポケットアイテムに「どこでもドア」というのがある。これは、ドアを開くと自分が行きたいところに行けるという極めて便利なすぐれものである。たいていの人はこの「どこでもドア」を欲しがるといえる。しかし、このドアがあるからこそ主人公のびた君は成長できないのである。友達のジャイアンやスネ夫・しずかちゃんが苦労して着いた場所に、不思議なアイテムを使って（楽をして）到着してしまう。のびた君は電車に乗ることも、歩いてそこに行き着く方法も何も学ばないで、結果にだけ到達している。いや到着したという結果だけしか得られないと言いつつすべきか。

ヨーロッパに行くのに歩いて、ヒッチハイクで行くというのは極端すぎて比較にはならないが、そのように極端に空間的距離がかけ離れている場合を除けば、「移動」そのものも実は立派な旅の一部なのである。この楽しさは内田百閒や宮脇俊三の文学作品を読めば納得いただけるのではないか。

鬼怒川温泉の濫觴

明治期の鬼怒川がどのような様子であったかを知るのに最適な記録がある。アーネスト・サトウ編著の『明治日本旅行案内』である³⁰。彼が福島から土ノ湯峠・若松・鬼怒川溪谷を経て日光へ向う時の描写をみよう。

山王峠はそれほど高くない。下野側へ下ると鬼怒川の溪谷で、川沿いの五十里村と藤原村との間はこのルートの中でも最もすばらしいところである。高原までの風景は誠に魅力的だ。一八七七年につくられた道は峡谷へと下り、多くの場所で岸から川に

向かって張り出し岩から突出する丸太に支えられている。以前はこの道は右岸側の山岳部を通り高原で左岸に移っていた。高原の対岸には温泉があるものの村人によれば訪れるに値しないという。旅宿は非常に貧弱でかつ汚い。風呂は単に川の近くの岩を掘り下げた水槽でしかない。藤原を過ぎると風景は興味を失い高德で山岳部から抜け出る。ここから数町先で左に湾曲する鬼怒川を渡り耕作された高台を越え、大谷川の奔流を経て今市に着く。当地から日光への直達路が続いている。

とあり、風景はみごとなものの、温泉地としては未熟なものであったことがわかる。サトウが指摘した「水槽」は早くは宝暦2年(1752)5月の「下滝村湯船・休所普請願書」⁽⁴⁾にその濫觴がみえる。

御願ニ付〔(破損)〕

金壹両壹分

道普請人足貳拾人程

巳ノ九月

川原湯船入替

金貳分

西ノ春中

泉湯小屋ノ湯船河原へ入替ニ引越申候

ノ金拾貳両ト貳朱

人足手間貳百四拾五人

右年々万水ニ付押流サレ破損仕候、去々
年休小屋〔(破損)〕ニかけ申候、湯船ハ
割木ニて〔(破損)〕申候、

下滝村 五郎兵衛 (印)

十兵衛 (印)

宝暦貳年

弥左衛門 (印)

申ノ五月

平右衛門 (印)

佐左衛門 (印)

庄兵衛 (印)

とあり、鬼怒川の河原に設けられた湯船と休

小屋が、洪水によって押し流されたため、道普請とともに人足を雇って修理するための願書が出されている。構造としては、河原に「泉湯小屋」があり、そこに入浴のための湯船が設置されていたのであろう。また、「年未詳申五月下滝村湯船・休所普請入用覚」⁽⁵⁾に、「一、湯船 但シ雨笈共ニ 式ヶ所」「一、休所 但シ式間梁四間 壹ヶ所」とあることから、「泉湯小屋」には二個の湯船が設置されていたことがわかる。

この泉湯小屋の運営は「湯守」を勤めた宇都宮上瓦町の塩屋清左衛門に委ねられた。その始まりはいつかは正確にはわからないが、現存する史料としては天保3年(1832)12月朔日付の「下滝村温泉湯守依頼状控」がもっとも古い⁽⁶⁾。それによると、塩谷清右衛門は湯守の権利を7ヶ年72両で借り受けている。さらに滝村が日光山領であることから、本坊である輪王寺宮に毎年運上金として50貫文、村へは差出金22貫700文支払っている。7年分の契約金が72両、毎年の税金が72貫700文というのは、結構な額である。

塩屋清右衛門との契約は、天保10年(1839)、弘化3年(1846)、嘉永6年(1853)、万延元年(1860)と、きっちり7年ごとに4度にわたって更新されている。天保3年から慶応3年(1867)までの35年間にわたって、宇都宮瓦町の塩屋清右衛門は、下滝村の湯守を独占しつづけたわけである。

ところが、慶応4年(1868)の下滝村の契約相手は今市間道の坂本屋文五郎となっている⁽⁷⁾。

相頼申湯守一札之事

一、金百拾九両也、但シ七ヶ年分、右は村方為助成金と槌ニ請取申候処実証也、但シ御運上納方之義は、年々五拾貫文宛御本坊様え御上納可被成候、外二三拾五貫文ツ、湯守方々村方え年々差出可申筈相定申候、年季之義は当辰年より戌十二月迄

七ヶ年之間、湯守相頼申候上は、湯一件ニ付脇方より違乱申者有之候ハ、私共罷出貴殿方え少も御苦労相掛申間敷候、但シ諸色品々差引之義は、相對勘定可仕筈ニ御座候、尤普請之義は新宅ニいたし候筈ニテニタ年季相定メ申候、為後日仍て如件、

下滝村

慶応四辰年正月 百姓代 仁左衛門
年 寄 平右衛門
年 番 祐 次

今市間之道

坂本屋文五郎殿

この史料によると、7年分の契約料は119両に、輪王寺宮への運上金は50貫文に、そして村への差出金は35貫文へと値上げしている。弘化3年以降の塩屋清右衛門の契約金がいくらであったかわからないが、もし天保3年以降、同じ金額での契約が続いていたとするならば、慶応4年の湯守交代劇は、湯守の利権に目をつけた坂本屋文五郎の割り込みだったのかもしれない。その手段として、契約金・毎年の税金の釣り上げが行われたのではなからうか。

この推測が当を得ているならば、近世における鬼怒川温泉の利用度も捨てた物ではなく、かなりの利用度があったと考えねばならない。温泉宿もなく、わずかに一件の休息所に湯船が二つあるだけの温泉に、それほど利権があるというのは信じがたいが、史料を信用する限り、事実である。

では、アーネスト・サトウが見た頃の鬼怒川温泉はどのような状況であったらうか。

明治18年の『地誌編輯材料取調書』によると、

日新湯（藤原村）

明治六年本村星次郎作之ヲ発見ス、村ノ南方、字モウキニアリ、同九年浴場ヲ修

築ス、湯質硝酸礬土剝篤亜斯及塩気ヲ含メリ、温度殆ト六十度ニシテ、主治ハ諸病ヲ兼ヌト雖、疝気スバクノ類最も効ヲ奏ス、浴場一ヶ所、逆旅老戸、一歳ノ浴客凡九百人、

滝ノ湯（滝村）

宝暦元未年八月、村内沼尾平吉ノ祖平左エ門、沼尾八郎治ノ祖沼尾重平兩人ノ発見スル所ナリ、湯質硫黄ニシテ少シ塩気ヲ含メリ、主治ハ焼疹癬疥痔等最も功ヲ奏ス、温度ハ百五度、浴場四ヶ所、逆旅老戸、一歳ノ浴客数凡千余人アリ、

とあって、日新湯には宿屋が一件に浴場が一箇所あり、一年の入浴客数が約900人。滝の湯には宿屋が同じく一件に浴場が4箇所あり、一年の入浴客数が約1000人であった。両湯で一年に約2000人近くの入浴客があったわけである。明治7年の入湯料金が1人50文であるから、約100貫文の収入となる。1両＝4貫文として計算すると、金25両となる。

滝村の温泉については、明治29年9月の「鉱泉検査願」には⁸⁾、

下野国塩谷郡滝村字和田沼温泉発見之原由

明治廿一年七月廿一日魚漁ノ為メ、其近傍ヲニ於テ岩間ヨリ温泉流出スルヲ、村内沼尾金吾外拾五名ニテ発見セシモノニ相違無之候也、

右願人総代

明治廿一年九月十六日 沼尾重兵
沼尾金吾

とあり、ここでは明治21年に和田沼温泉が発見されたことになっている。同じ沼尾一族の話であるのに、宝暦2年説と食い違う記述がなされているのはどういうわけか、不明である。宝暦2年のものとは別に新たに発見されたということであらうか。

表1 藤原町源泉表(明治・大正期)

	源泉名	位置	発見(発掘)年月日	管理者
鬼怒川西岸	下滝温泉	大字滝字和田沼, 竹ノ沢地先	大正6年2月発掘	八木沢善八
	鬼怒川温泉	〃 字和田沼816番地先	〃	〃
	大滝温泉	〃 字和田沼地先二子達和南端	大正8年9月10日発見	根津嘉一郎
		〃 字和田沼854番地先	大正11年12月5日発見	星藤太
鬼怒川東岸	湯ノ滝温泉(甲)	大字藤原字沢2番地先	大正8年8月20日発見	星藤太
	〃(乙)	〃	大正13年7月12日発見	星献太郎
	〃(丙)	〃	大正8年8月20日発見	星藤太
	〃(丁)	〃	〃	〃
	〃(戊)	〃	〃	〃
	宝ノ湯(甲)	〃	明治8年5月発見	星藤太
	鳶ノ湯	大字藤原字竹ノ沢1604番地先	大正14年3月4日発見	渡辺与八
西男岸鹿川	元湯	大字川治	享保3年頃発見	高橋秀治
	新湯	〃 字下河原1番地先	明治19年頃発見	小平弥一郎 外4名

註：藤原町史』通史編より転載

ところで鬼怒川温泉は、川の東西で多少呼び名が異なり、西岸は下滝温泉あるいは滝温泉・大滝温泉と呼ばれ、東岸は藤原温泉・麻屋温泉と称された。麻屋温泉と称された理由は、明治40年頃から八木沢善八によって経営された「麻屋支店」によるものであろう。大正5年8月12日の下野新聞に「道に沿ふて麻屋といふ二階造りの古風な温泉宿がある。崖に下りて行くと温泉が湧いて居て此の絶景を眺め乍ら湯浴みすることが出来る」と記されている。当時は、あくまで河原の湯であったのである。

八木沢の話によると⁽⁹⁾、

泊まり客は、「湯治」がほとんどで、近郷近在の人でした。馬の背に米やミソを付けて、クラの上にコタツのヤグラのようなものを付けて、その中には行ってやってくるお年寄が目立ちました。

とあるように、この頃は観光というよりは、湯治場でしかなかった。明治35年刊行の片山

友彦の『勝地名区遊覧案内』にも、「滝温泉」の案内として、

日本鉄道日光線今市停車場より北に向って行くこと四里半の処に在り、其地は鬼怒川に臨みて幽邃閑雅の処なり、温泉宿は湯主幸屋の一戸のみにて、此湯は皮膚病、火傷等に特効ありと云へり、

とあり、やはり湯治場としてのイメージが強い。ところが大正に入ると、鬼怒川の東西両岸で新源泉が次々と発見されることになり(表1参照)、近在の地元民相手の湯治場だけではなく、本格的な温泉旅館の経営に乗り出す雰囲気が醸成された。

鬼怒川温泉の発展には、新源泉の発見だけではなく、実は鉄道の整備がリンクしていた。鬼怒川東岸では大正8年に星藤太によって湯ノ滝温泉(甲)が発見されているが、この星藤太は藤原軌道の創設者でもあった。藤原軌道株式会社は、大正4年3月23日に資本金10万円でスタートし、同年10月30日に改組され

鬼怒川観光の歴史と課題

表 2 鬼怒川観光年表

年 期	鬼怒川温泉関連記事	東武鉄道関連事項	その他の出来事
明治30年		東武鉄道株式会社設立	金本位制実施
明治32年		北千住-久喜間開通	
明治40年	滝温泉客615人、川治温泉客1496人		足尾暴動
明治43年		浅草-伊勢崎間開通	軽便鉄道法公布。東京市電、葉平橋に開通
明治45年		佐野鉄道合併	ジャパン・ツーリスト・ビュロー創立
大正 2年		太田軽便鉄道合併	
大正 4年	藤原軌道設立		大正天皇即位。対華21箇条要求
大正 6年			金谷真一、日光自動車株式会社設立
大正 8年		和田沼に第1号源泉発見	
大正 9年		東上鉄道株式会社合併	株価暴落し戦後恐慌起こる
大正10年	下野電鉄と改称		木戸ケ沢鉱山休山
大正12年	星藤太、日光・塩原・那須間道路建設の意見書を提出する。	和田沼に第2号源泉発見	星藤太、県会議員に当選。関東大震災
大正14年	大滝館開業	東上線全通	
大正15年	3月今市駅-鬼怒川間の乗合自動車開業		小佐越・藤原・滝・大原で大幅な人口減少
昭和 2年	星藤太、合資会社昭和自動車商会設立	館林・久喜・伊勢崎間電化	金融恐慌。モロトリアム実施。山東出兵
	温泉区名を鬼怒川温泉に、下滝駅を鬼怒川温泉駅に改称		
昭和 3年		太田・相老間電化	自作農創設維持事業開始
昭和 4年	今市・高徳・天頂間直通列車運転	東武日光線開通、下今市駅開業。	金輸出解禁令公布。
		滝地区に広大な土地を買収	世界恐慌始まる。
昭和 5年	芸妓8名がラジオで鬼怒川小唄を放送	鬼怒川温泉駅改築落成	下野中央銀行、支払い停止。金輸出解禁
昭和 6年	星藤太・桜田壬午郎、源泉の開発に成功	鬼怒川温泉ホテル開業、金谷氏に営業依頼。宇都宮石材軌道買収	三依村、村有林50町歩の立木売却
		麻屋裏に第3号源泉試掘	満州事変。自動車交通事業法制定
昭和 7年	川治温泉、下野新聞の県下十二勝で一位に選出 関東自動車会社、宇都宮-鬼怒川間の営業開始 8月日光自動車株式会社、今市-鬼怒川間路線譲り受ける。		救農土木事業始まり、三依村で河川工事・道路修築実施。藤原村でも農村振興土木事業として旧道改修工事実施。
			上海事件。
昭和 8年			国際連盟脱退
昭和 9年	接客業関係戸数258戸になる 8月鬼怒川温泉上水道施設の提案が議決される	自動車事業開始	
昭和10年	2月藤原村を鬼怒川町に改称の議案が出される 5月藤原村は藤原町となり町制施行される	浅草-鬼怒川間の特急電車運転開始 第3号源泉さつ掘工事完了	木戸ケ沢鉱山再開
昭和11年	旅館・料理屋等の塵芥処理場が滝地内に建設される。		2・26事件
昭和12年	12月日塩道路全通、鬼怒川高原スキー場発足	上州鉄道社線買収完了	日光自動車株式会社、鬼怒川-川治間の路線譲り受ける。日中戦争開始
昭和13年	8月省営バス営業所鬼怒川派出所設置 温泉地区で火災発生		国家総動員法公布
昭和14年			第二次世界大戦始まる
昭和18年		下野電鉄買収、鬼怒川線獲得	

下野軌道株式会社となる。

下野軌道は、最初、今市停車場と藤原村を結ぶ線路を作り、鉄道沿線の鉱山から産出される鉱石や藤原村の木材・木炭等を運搬することが目的であった。しかし、それが大正10年には下野電気鉄道となり、路線を拡張し、同15年に東武鉄道の経営参画を受け、昭和4年には全面的に東武鉄道の傘下に入り、ついに昭和18年に鉄道事業を東武鉄道に譲渡するという経過の中で、下野軌道は、鬼怒川の観光化に大いに寄与したのである(表2参照)。

鬼怒川温泉の発展

では、鬼怒川は、いったいつ頃から観光地として認識されるようになったのであろうか。もちろん江戸時代から温泉はあり、湯治場として数百人の浴客を迎えていたのであるから、その名がある程度は知られていたことは当然である。問題は、一般の観光客に観光地として認識されたのがいつかということである。

大正9年発行の『温泉案内』(鉄道省編集、博文館発行)には、「東北線」の項に、黒山、伊香保、沢渡、四万、川原湯、藪塚、西長岡、

表3 観光案内書一覧

発行年	出典	鬼怒川	川治	日光	湯西川	那須	塩原	木上	谷川	伊香保	草津	四方	川原湯	敷塚	万座
1908	日本漫遊案内			○		○	○			○	○	○	○	○	
1921	旅程と費用概算			○			○			○	○	○	○		
1923	温泉案内			○		○				○	○	○	○		
1925	三都中心名所の旅			○		○	○			○	○	○			
1927	絵入当世藤栗毛									○					
1929	旅行礼賛	(大滝)	○	○		○	○		○	○	○	○	○		
1929	名勝温泉案内	(藤原)				○	○		○	○	○		○	○	○
1930	日本案内記	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○
1932	旅程と費用概算*	○	○	○		○	○			○	○				
1933	景観を尋ねて					○	○			○	○				
1934	名勝温泉案内	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○
1938	関東東北旅行案内			○			○								
1942	ポケット日本温泉案内	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
1949	風景読本	○	○			○	○								
1954	温泉と旅の計画事典	○		○		○	○	○	○	○	○	○			○
1956	旅程と費用	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

註：○印は掲載をあらわす。日光は日光湯本温泉の略

梨木、日光湯本、塩原、那須、甲子、母畑、嶽、云々と38ヶ所の温泉地を挙げながら、鬼怒川については触れていない。

ところが昭和2年刊行の『温泉案内』には、「大滝温泉」として、

東北本線宇都宮駅から分岐する日光線今市駅から、下野電気鉄道に乗換、鬼怒川温泉駅から二丁乃至三丁、別途今市駅から自動車賃九十銭、同貸切六円、俵賃一円六十銭。地は鬼怒川畔にあり、美しい渓谷が目を見せしめる。付近夫婦松、虹見の滝の勝がある。

と紹介されている。旅館としては、麻屋・大滝館・星野屋の三軒があがっている。『藤原村郷土ノ研究』によると、昭和5年には、旅館は麻屋・大滝館・星野屋旅館・鬼怒川旅館・錦園旅館・鬼怒川温泉ホテル・井桁屋旅館・朝日屋旅館・桶屋旅館の9軒が数えられ、着実に観光地化しつつあった¹⁰⁾。

今、試みに手元にある旅行案内書にいつ頃から鬼怒川温泉が目次項目に挙がってくるかを表にしてみると、表3のようになる。網羅的に旅行案内書を検索したわけではないので、正確なことはいえないが、1929年(昭和4)に大滝温泉の名が『旅行礼賛』に登場して以来、ほぼコンスタントに鬼怒川温泉は旅行案内書

に紹介されている。そして1930年(昭和5)には、川治・湯西川など東武線沿線の温泉地が出揃う。旅館が9軒に増えていることと合わせ考えても、1929年～1930年というのが鬼怒川温泉にとって一つの大きな画期であったといえよう。

1929年～1930年というのは、表2を見るとわかるように、東武鉄道が鬼怒川地区に本格的に進出してきた時期であった。1929年に東武日光線が開通して、下今市駅が開業すると、下野電鉄が乗り入れた。こうなると、これまで日光・鬼怒川に行くのに省線(国鉄・JR)を利用するより、東武鉄道・下野電鉄を利用するほうが便利になった。そうして1930年8月には下野電鉄の鬼怒川温泉駅が改築落成したのである。

ところで東武資本の鬼怒川温泉ホテルであるが、1930年刊行の『藤原村郷土ノ研究』に大滝館と並んでその名がみえるのは事実とことなる。鬼怒川温泉ホテルは1924年(大正14)2月に開業した大滝館を買収して、約100万円の資本を投じて近代化した物が、当ホテルで、その開業は1931年(昭和6)3月である¹¹⁾。

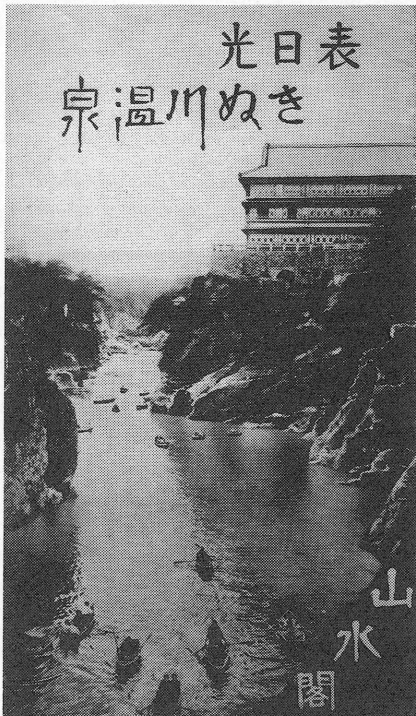
東武という中央資本の侵入に刺激されてか、当時の村長・星藤太はいっその発展のため、さらなる高温の源泉の開発に力を注ぎ、1927年から桜田機械工業株式会社の社長桜田壬午

郎の協力を得て、ボウリングを開始していた。その源泉の開発が成功するのが、1931年のことである。一方、1930年には鬼怒川温泉から8名の芸妓が上京して、ラジオで「鬼怒川小唄」を放送している。電波による宣伝も積極的に行われだしたのである。

繰り返しになるが、1930年前後は、まさに鬼怒川温泉が近代的観光地となる画期であった。

昭和10年発行の『旅はクーポン』には、「鬼怒川温泉」の項目が設けられている¹¹⁹。

鬼怒川温泉 栃木県塩谷郡藤沢村
省線日光線今市駅或は日光駅から乗合自動車
で約四〇分。此の外、東武電車の下今市
駅で下野電鉄に乗換へ、鬼怒川温泉駅下車。
もと大瀧温泉と称した所で鬼怒川溪谷の景
勝の地に出来た温泉場である。此の溪谷は
春は野州花。秋は紅葉の美あり、また虹見



写真① 昭和初期の鬼怒川温泉のパフレット

の瀧や、夫婦瀧等奇勝多く。

其の他舟遊び、釣魚、茸狩の快もある。

近頃では料理屋も多く出来て、脂粉の香の
高い温泉郷として定評がある。

ここに指定旅館 鬼怒川温泉ホテル、麻屋、
鬼怒川館がある。

と記されている。また、昭和29年に4版が出た『温泉と旅の計画事典』には、鬼怒川温泉への交通について、次のように記している¹²⁰。

つまり戦前までは、塩原は、那須とおなじように、駅からぐつと温泉宿まで入ると、そのままドンづまりで、また同じ往路を戻って来ざるをえなかつたのが、戦後、塩原古町（いちばん最奥の温泉）から、高原山の北の腹を縫つて、鬼怒川温泉へ歩かずにぬけられるようになったのが、まことに特筆すべき事実なのである。

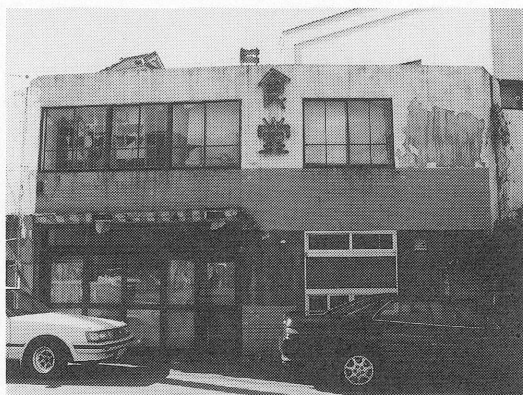
さらに、《鬼怒川温泉》の項に¹²¹、

日光とはちよつとはずれて、今市から北上した鬼怒川のほとりに湧く温泉街で、東京都民の終末の歓楽地としては、つとに著名である。浅草から電車で三時間の直通もあるので便利である。

とあり、東武鉄道のことを交通手段としてみえる。その詳細は「浅草－下今市－鬼怒川温泉－急行直通、三時間四三分、片道二五〇円急行料一〇〇円」である。現在はスペーシアで約90分で浅草－鬼怒川温泉間を走っている。ロマンスカーは昭和24年に「きぬ号」「けごん号」が運転を開始し、昭和28年には特別設計のカルダン式ロマンスカーも登場した¹²²。昭和31年には直通特急ロマンスカーが登場し、2時間16分（142km）と短縮され、運賃は片道290円と特急料金200円の合計、490円となっている¹²³。当時ロマンスカーは観光シーズン



写真② 鬼怒川温泉地の街並風景
(1997年11月4日撮影)



写真③ 鬼怒川公園駅前の廃屋ホテル
(1997年11月4日撮影)

の6月中旬～9月中旬までの期間、1日に2便しかでなかったが(土曜日は午後1回増発)、急行でも2時間40分で、2年前に比べて1時間も短縮している。

この東武鉄道の時間短縮、およびロマンスカーの登場は、鬼怒川温泉への観光客の増加に触発された結果と考えることができる。浅草から一度も乗換え無しで温泉地に2時間強で行けるといえるのは、東京都民にとって大きな魅力であったに違いない。

かくして、鬼怒川は、箱根同様、東京から手軽に行ける観光温泉地となったのである。

鬼怒川観光の課題

鬼怒川温泉に行き、お湯につかると、本当にいい湯だなあと感じる。しかし、一步ホテルを出ると、あまりの景観のひどさに、一瞬で興ざめする。これでは、鬼怒川を「観光する」気はおきないし、事実、観光すべき場所もない(写真②③参照)。

鬼怒川温泉が観光地として存続するためには次の3つの問題点がある。

- ①街路が美しくない。
- ②景観が台無しにされている。
- ③町としての統一性がない。

この3点はじつは、一つの事象に関わって

いる。それはホテル・旅館の利己主義である。

ホテルや旅館側の論理としては、AホテルやB旅館ではなく自分のホテル・旅館を意識して欲しいという利己的な競争意識が働く。これは自由競争の原理として企業ならば当然の心理である。だが、この狭い競争心理が観光地を駄目にする一因でもある。

最近のホテルはホテルの中に娯楽施設がほとんど揃っている。まず到着すると、ラウンジでコーヒーがサービスされる所もあり、一息つくとボーリング場やゲームセンターが待っている。一風呂浴びて喉が渇けば、ビアホールのような場所もある。夕食時には食事場が宴会場になるように設定されている。大人向けにはコンパニオンがオプションでつき、若者向けにはカラオケがサービスされる。バーやクラブもどきの飲み屋も入っていれば、ラーメン屋のような廉価な屋台風の店もあったりする。風呂も温泉だけでなく、露天風呂があり、打たせ湯がありと趣向を凝らしている。宴会が売りのホテルや旅館には、二次会セットまである所が出てきた。ファミリーをターゲットにしたホテルでは、アニメ映画の上映や人気番組のショーがあったり、工作教室(陶芸や木工)が開かれたりしている。

朝になれば、朝市が開かれ、その土地の物産が一同に集っており、お土産を買うにも便

利にできている。つまり、一つのホテルや旅館に行けば、そこから外にでなくてもすべて事足りるように設定されているわけである。宿泊施設側としては、せっかくの客からたんに宿泊費を得るだけではなく、お土産やレジャー費まで自分の所に落していってもらおうという魂胆である。

しかし、これではかえってリピーターは減るのである。一般に旅行者が旅行先をきめるのは、宿泊施設に左右されるよりは、未知の場所への期待感による場合の方が多いし、また二度目以降は、その土地のよさによるのであって、宿泊施設のよしあしはその次でしかない。たとえば、鬼怒川のAホテルに泊ってとても満足した旅行者が、どんなに満足しても次の旅行先を鬼怒川にきめるかどうかはわからないし、鬼怒川に決めた場合でもAホテルにするとは限らない。旅行者は浮気性なのである。ほかのホテルにも泊ってみたいし、しっとりとした和風の旅館にも泊ってみたいと思うのである⁽¹⁷⁾。

ただし、人に勧める場合は、自分の経験でしか話ができないから、もしA旅館に泊って「良い」と感じた人が、友人から鬼怒川での宿泊先を相談されたならば、おそらくA旅館を勧めることになるであろう。それゆえ、自助努力は必要ではある。

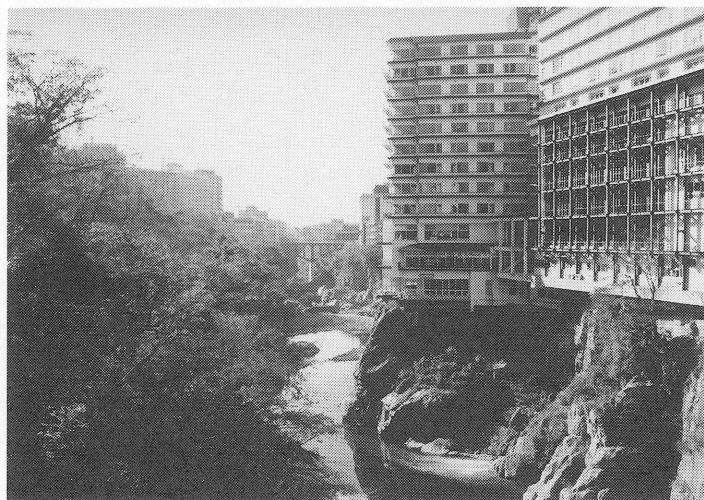
しかしこれが、鬼怒川がなんといってもいい場所だ、という印象を旅行者がもった場合どうなるか。数ある旅行先・観光地の中で、再度行きたいのは鬼怒川であるとなった場合に、AホテルであろうがB旅館であろうが、はたまたCペンションであろうが、競争相手は鬼怒川内に限られ、競争率はぐっと低くなる。そのあとはホテル・旅館の持ち味の勝負なのだ。

ようするに、自分のホテル・旅館が目立とうとするのは、まず自分の観光地に客の目を向けさせてからの話で、それ以前の段階ではないのである。何度きてもまだ見足りないとい

う気持ちにさせて旅行者を帰宅させるのが、リピーターを確保する最善の策である。それで一番得しているのが京都である。京都には「多くの」歴史がある。その歴史は一度や二度では見切れないほどの多さである。そのため、京都は観光になんら努力もしないで、安穩として観光地足り得ている。それは悪く言えば、過去の遺産に乗っかっているだけで、いずれ足元をすくわれる危険性を孕んではいない⁽¹⁸⁾。しかし、今のところ過去の遺産はまだ食いつぶされてはいない。このような歴史性に富んだ場所は、ひじょうに得である。観光客の方で勝手に名所を見つけてくれるからだ。そして、いかに近代開発によって名所旧跡がその真価を低くしつつあっても「京都＝古都」というブランドがまだ幻惑的に観光客のノスタルジーをくすぐっている。

では鬼怒川はどうか。草津・伊香保や伊豆・箱根に見られるような歴史性は薄い。草津・伊香保には明治維新後にベルツというお雇い外国人がやってきて、その効能を保証してくれたという折り紙付きの面があり、草津には草津節というテーマソングがあり、伊香保には文人墨客の足跡がある。伊豆・箱根は北条氏の活躍の場所という歴史性があり、金太郎伝説、江戸時代の難所といわれた関所がある。また外国人が軽井沢について愛した芦ノ湖の景色がロマンチックでもある。

ところが鬼怒川には歴史性もなければ、お墨付きもない。文学性も薄い。熱海が、東京からの近便性と同時に、どれだけ尾崎紅葉の『金色夜叉』の恩恵を受けたかを考えれば、観光地にとって文学性がいかに重要かがわかるであろう。その意味で、手っ取り早い方法は、売れっ子の小説家に、鬼怒川を舞台に小説を書いてもらうことだ。そしてできれば、テレビドラマ化か映画化してもらうことだ。その場合、小説は恋愛小説でなければならない。男女が自分達を小説の主人公に投影できるようなストーリーと舞台作りが重要である。



写真④ 鬼怒川溪谷にせり出したホテル（1997年11月4日撮影）

二番煎じでもよいから、なにか印象的な樹木や岩などの前で二人が約束したり、別れたりする名所も必要である。駅前には二人が初めて出会った粋な喫茶店があり、そこから二人が歩いたプロムナードが続いている、といった景観造りができれば、まずはずれることはあるまい。

今の鬼怒川の街路は、それに比べてあまりにもお粗末である。ホテルの中に入ってもらえばそれでよい。ホテルの入口周辺ですら、景観的に整備されていない。先に京都は得をしているといったが、これは歴史性だけの問題ではなく、街並みにおいてもそうである。もちろん京都といっても、今はそれらしき所を探さねばならないが、それでも清水寺から八坂神社に行く東山界限、祇園、先斗町、木屋町筋、御所近辺の寺町通、室町烏丸上ル通、上七軒等々、他の都市に比べれば街並みの揃った所は幾らも見出せる。そこには伝統という歴史に培われたものがあると同時に、そこに息づく人々の「雰囲気」が漂っている。コンクリートの直方体に囲まれた寝だけの居住空間ではない。まさに京都に住む人が生活している場がある。顔のない移動民が一時的に住むのではなく、はっきりとした表情の

ある人間が住んでいる安心感と懐かしさを、来訪者に与えてくれる。それは、地方の農村や山村で、はっきり職業がわかる人達に出会った時の感興に似ている。

鬼怒川にはそれがない。

どこにでもある地方の整備されていない街並み。観光以外いったいなにで生活しているのかわからない家々。どこに隠れたか、子ども達の姿もみかけない。この町はいったいどんな町なのか、町に表情がない。

芦原義信は街並みの構成について、次のように述べている¹⁹。

一軒一軒はよく見ると違っていても、いずれも同じ建築技術と工法が使用され、街全体に一体感があり共通の価値観によって支えられている。街並みとは本来、このような共通性の上に成立しているのだから、それによって街路や地域に対する強い愛着心が生まれるのである。

観光地といえども、主人公は地元住民である。地元住民の生活があってこそ、その街は生命力を持つのであり、「共通の価値観」が生まれ、「街路や地域に対する強い愛着心」

が生じるのである。この愛着心が育んだ街並みこそが、来訪者の旅愁をこよなくそその原因なのである。京都も歴史が古いから街並みが残ったのではけっしてない。京都の町に住む人々の努力があって、初めて今に残る街並みがかろうじて維持できているのである。

一方、鬼怒川には歴史性がなくとも、それに代わる物がある。それはまさにアーネスト・サトウが賞賛した溪谷美である。巨岩と清流が織り成す自然の美しさは、歴史「都市」にはないものである。この溪谷美を生かさず鬼怒川観光の将来はない。ところが、各ホテルはその溪谷美を自分のホテル・旅館だけで独占しようとせんがために、ホテル・旅館を川岸の絶壁に建てて、窓から溪谷が見下ろせるようにしてしまっている（写真④参照）。

これでは、ホテルの中に入れてなんとか窓越しに鬼怒川の美しさを窓枠分だけ眺められるが、それ以上の観賞は不可能である。各ホテルともそうしてしまっているため、鬼怒川の美しさは部分的で、むしろ対岸のホテルの客室の中がすっかり見えてしまうという興ざめを催させてくれる。

この自己中心的な景観独占を排除し、鬼怒川の兩岸に遊歩道を設けて、観光客にも地元民にもものんびり散策しながら溪谷美を後ろの山々の風景と共に観賞できるようにすればどんなにかすばらしいことであろう。

オギュスタン・ベルクは土地の風土性について「通態性」というキーワードで説明を加える。彼は、風景は環境に対する社会の一つの手がかりであると述べる。そこには人間主体だとか物理的環境だとか、どちらか一方的な考え方では風土は解けないという考えがある。さらにオギュスタン・ベルクは「社会は決して自然を制御しつくすことはでき」と述べる。その理由は、「社会が決して自身自身を十分に統御できない」からであるとし、「自然と文化という理論的な二つの極の間の創造的緊張関係はいつまでも持続してゆき、

それが風土を歴史的に発展させてゆく」というわけである²⁰。

鬼怒川もまた、地方の都市として、生活維持のための発展を遂げながら、他方、観光資源としての自然景観を保存しつつ、相互に「通態性」をもって新たな、そして鬼怒川独自の風土を生むことが可能なはずである。

おわりに

観光地は同時に地元住民にとってもアメニティあふれる都市でなければならない。駅前には観光バスとタクシーだけの物になっていては、あまりに寂しい。駅に着いて、観光客が、さてどこを見学しようと考えた時、無料で気軽に解答を得られるサービスが意外と用意されていない。

あくまで一案にすぎないが、駅前には中途半端ではなく、きちんとした地域資料館を設けてはどうだろうか。その1階には観光案内所(無料)を併設した資料館(安価ではあるが有料)、2階には地域住民のための公共図書館を設置するのである。観光案内所で地域の概略を聞いた来訪者は、より詳しく知りたければ、2階の図書館に行き、郷土史コーナーにゆけばよい。

また、1階の資料館は、正式な学芸員を置き、年に数回の企画展あるいは特別展を催し、地域の史料や文化財を展示し、地域住民と観光客に郷土の歴史・民俗を理解してもらい、文化財保護への体制を整えることも可能である。

1931年に源泉掘削に成功し、1948年には自ら桜観光株式会社を創立した桜田壬午郎は、その自叙伝の中で、次のように述べている²¹。

私は此土地を分譲するについて同業者に多く分けることにした。如何に資産家でも、有爵者でも、又人格が面白くない人には分譲せぬ。住んで貰いたくないからである。同業者は共存共栄の間柄であるからで、

色々斯業上の研究も出来るのである。(中略)これを跡は野となれ山となれで最初の信義を顧みず、利権的に売って行く人は友情に反した行為として深く反省を求めているのである。

桜田の脳裏には、温泉を媒介にして鬼怒川が住民にとって、また観光客にとって、理想的な安息の地になることが描かれていた。しかし、観光客が増えるにしたがって、のんびりと河原の湯にひたって山腹を眺めていたのどかさは失われ、近代建築による直方体のホテルが鬼怒川の両岸を占拠してしまった。

オギュスタン・ベルクは近代建築に対して痛烈に批判している²²。

それはどんな風土性とも風景的動機とも無縁の空間ですが、一方で風景の中に必然的に挿入される建造物という形で表現されます。一言で言えば、その根本的な抽象性から周囲の世界へと拡大応用されて以来、それは冷淡でばかげた空間なのです。

合理的で普遍的なものを求めすぎた近代社会から、我々は前近代的世界へ回帰すべく旅行にでかけるのではなからうか。こんなに狭い日本ですら、地域によって原風景が異なる面白さ。地域ごとの風土性を我々は自覚して作り、維持しなければならない。

(註)

- (1) 石森秀三「ネオ・ノマド(新遊動民)の時代」(高田公理・石森秀三編『新しい旅』のはじまり—観光ルネッサンスの時代—』p 30~31, PHP 研究所, 1993年)
- (2) 池田光穂「フィクショナル・ツーリズム」(高田公理・石森秀三編『新しい旅』のはじまり—観光ルネッサンスの時代—』p 122, PHP 研究所, 1993年)
- (3) アーネスト・サトウ/庄田元男訳『明治日本旅行案内』ルート編Ⅱ, p 294 (平凡社, 1996年)。
- (4) 「沼尾一郎家文書」(『藤原町史』資料編第五章, p 676, 藤原町, 1980年)
- (5) 『藤原町史』資料編第五章, p 676
- (6) 『藤原町史』資料編第五章, p 678
- (7) 『藤原町史』資料編第五章, p 680
- (8) 『藤原町史』資料編第五章, p 970
- (9) 『藤原町史』通史編, 第四章, p 671 (藤原町, 1983年)
- (10) 鬼怒川小学校蔵『藤原村郷土ノ研究』, 1930年。
- (11) 『藤原町史』通史編, p 724。
- (12) 日本旅行協会編輯『旅はクーポン』p 112, 同所発行, 1935年。
- (13) 日本旅行研究会編『温泉と旅の計画事典』p 98, 千代田書院, 1953年。
- (14) 『温泉と旅の計画事典』p 109。
- (15) 『東武鉄道六十五年史』p 78, 東武鉄道株式会社, 1964年。
- (16) 佐藤總三郎編『旅程と費用』p 180, 日本交通公社, 1956年。
- (17) ジョン・アーリーは『観光のまなざし』(加太宏邦訳, 法政大学出版局, 1995年, p18)の中で「ツーリストのまなざしはびっくりするほど気まぐれで、いつもなにか新しいものとか、なにか違うものを探したり期待したりしている」と指摘している。
- (18) 中村修也「観光都市論(上・下)」(『史境』29・30号, 1994年・1995年)
- (19) 芦原義信『街並みの美学』p 55~58, 同時代ライブラリー, 岩波書店, 1990年。
- (20) オギュスタン・ベルク『日本の風土性』, p 102~103, 日本放送出版協会, 1995年。
- (21) 桜田壬午郎『物心五十年』, 1943年。
- (22) オギュスタン・ベルク『日本の風土性』, p 116。